



鉄斎の書

山荘風雨図
(紙本淡彩)

かつて鉄斎展の会期中に展示場において、ある人からこんな質問をうけた。「この鉄斎の書は上手なんですか」と。その途端になるほどと思った。それは質問の意がその人にとってきわめて率直であると同時に、鉄斎の書についてそうした受け取り方がさぞ多いことであろうと直感したからである。

鉄斎の作品には必ずといってよいほど着賛がある。賛は画題によって広く古典の中から引用した長文のものや、単に画題のみのものまで、さまざまであるが、その書はきわめて個性的である。書体は楷、行、草、隸、篆体各様をもって自由自在に書かれているばかりでなく、時によっては、普通の辞書にはみえない古体の漢字が用いられている。したがって鉄斎の書は読み難く、まず一般の人にはなにが書いてあるのかわからないというのが普通で、その上書風の個性が強いので、それが上手であるのか、下手であるのかわからないというわけである。

極端に個性の強い書風は、それを鑑賞する側からも好き嫌いがはっきりわかる。鉄斎にかぎらず個性の強い書風の場合は、字癖を捉えることによってその人の書を真似ることは比較的容易であるが、鉄斎の場合の偽物は絵よりも書の方が見破りやすい。何故ならば、鉄斎の書には鉄斎みずからがそこに没入し、巧まずして滲み出る学識と人となりを感じられるからである。字癖の真似は出来得てもそこにこめられた気魄と自在の變化は、何人にも追隨を許さない。鉄斎の作品は絵の出来工合も勿論であるが、賛の書の出来映え如何によってこそ鉄斎の真面目を発揮しているのである。

鉄斎の作品は青年時代から、八十九才の歿年に至るまでその数は万を超えるといわれている。したがって作品には出来の良し悪しのあることは当然であるが、晩年に至るほど筆勢は勁く、雅味は深く、賛意もまた深い。賛文を読み下し、その意を解して、鉄斎の意図するところを把握することこそ鉄斎作品の真の鑑賞なのである。しかし「万卷の書を読み、万里の道を行き、「老いて益々学ぶ」ことを実践した儒者鉄斎の学の深きは、我々を容易に近づけない。鉄斎の書を読み理解することのむづかしい所以である。

季刊 美のたより No.28

昭和49年 6月1日

発行 大和文華館